

第八項 参考報告書
各地方よりの報告を諸君に示すに當り、蘆粟なる新産物
の今日ま於て如何に傳播せしむるに如何の勸奨を受けざる
者なるを知らしむるに亦た此の要務に屬す故に其知
り得べき者を此に擧げんとす
明治十三年三月綿糖共進會は蘆粟并に其糖を出品せし
ものゝ東京新潟群馬千葉栃木堺愛知静岡岡山梨岐阜長野
福岡青森山形石川島根廣島山口愛媛大分熊本等合せ
一府廿縣人員凡四十名にして其品評を受けたるに山口
縣石川平兵衛上等出島糖と類し香味白糖と異ならむと
の評を受け長野縣北澤元榮天光と似て香味蔗糖と稱
たりとの評を受け新潟縣岡田省吾等の製上等の品評を

受け東京府芳野世經静岡岡縣丸尾文六愛媛縣香川洋平青森縣三浦吉十郎福島縣橋本傳左衛門の出品上陳の者に比すれり稍劣れるも蘆粟一種の香味たり云々の品評を得たり

今春水車并馬力横轆轤(鑄鉄)を三田農具製造所にて製造せしものを大坂共進會へ出品せしより府縣よ送致せし甘蔗作地方の外福島對面ヶ原三基新潟四基宮城一基岩手一基青森一基石川一基北海道一基皆な蘆粟用よせしものならん忽備式の蒸餾器ハ駒場よて試験し又赤羽工作分局よて模造せられたる縦轆轤並忽備釜數基あり

三田育種場より本年度府縣の注文よ應して早熟蘆粟の

種の種々を分配せし宮城石川栃木の三縣ハ一石以上其以下を送りし青森福島高知滋賀加奈川群馬熊本新潟の八縣人民より願出せしもの三名合せて二十四石又老農の購へあるもの少量宛分配ありし一使二十二縣なりと又開拓使よて人民よ拂下げたるもの支那米國兩種ねよて二石四斗餘廿五年度ハ北海道ハ廻漕ありし一壹斗五六升なりと云ふ

先づ以上の實況なるま本會よ報告を送付せられたるハ一使一府十縣よして之を人員とするハ升名よ過さるは蓋し集議會の時期埒迫よして之を送付するよ違なきよ因るべしと思ひる爰よ寄送よ受けたる者ハ皆な之よ掲げ諸君の參觀よ供す

開拓使

第一 蘆粟耕種便益の論
 蘆粟の莖葉穂實共に籾黍と髣髴として差異する所あり僅
 り糖分の有無のみなり
 蘆粟ハ支那國に於ては往古より有りて近來歐米深の諸州
 へ移し現今各州之と盛大に耕種製糖するに至れり其業の
 盛大と致す所由ハ其成熟の期速く寒暑乾濕旱魃水損虫毒
 と恐るゝと少く肥料と多く要せず蕪草も侵されざるを以
 て耕種に便あり且つ含有の糖分多く且つ性質佳美なり尙
 や穂實の以て牧畜に適すれりなり蘆粟甘蔗の耕種製糖の
 難易收穫の多寡損益と比較すれり左の件々の如し
 第一 蘆粟ハ成熟の期速くして大約六ヶ月内はあれども

甘蔗ハ我國にてハ八九月を経るゝ非されハ成熟せず
 故に蘆粟ハ北海道の氣候地質に能く適すと雖とも甘
 蔗ハ決して否らざるなり
 注し曰く蘆粟ハ成熟の期速かなるが故に支那米佛
 諸國の寒地に於けるも能く十收穫をなし又熱地に
 於けるも必ず六ヶ月内は成熟するが故に濠洲の如
 き寒暑別なく常に温暖なる地に於ては毎年二收穫
 と成すなり甘蔗は之れを反して我國に於てハ八九
 ヶ月にして成熟すと雖とも暑熱強き地は於てハ十
 ヶ月より十五ヶ月と經るゝ非れハ能ハざる所あり
 故に甘蔗産に富榮なる濠洲に於てすら近年蘆粟と
 主要とせざるに至れり

第二 蔗粟の寒暑乾濕の地と脈の早魃水損虫害と恐れ

と然るま甘蔗の寒濕の地と脈ふ故に北海道の地は適
せざる推て知る可き也

注よ曰く蔗粟は固より旱魃水損虫害を恐れざるは

殊に北海道が其愛ひ見よなりとす然るは甘蔗は琉

球大島小笠原島等並於ての年々穰々同根より重生

をぶが故に毛根強壯にして旱魃を恐れずと雖も

四國九州其他各地に於ての年々斷茎種を植るを以

て毛根怯弱にして旱魃の如きハ注水の勞容易は非

なるなり其勞の難き旱魃彌々嚴酷よ登れハ池尽き井

枯れ農夫は晝夜寢食は間なきに至ると多量とす

第三 蔗粟の肥料の甘蔗の如く多量を要せし由しを要す

と雖もハ北海道に於て耕耘するときは其費の少なき

巨大なりとす

注よ曰く蔗粟甘蔗の肥料は魚粕を以て最良とす故

に四國九州等に於て耕耘する甘蔗皆魚粕を肥料と

す然るは其魚粕殆んど悉く北海道の海産を仰ぐと

るを得ず而して其價ハ北海道より積取よ付てハ出

港稅手数料運賃金利子諸雜費等を加ふれば北海道

に於て百石八百圓の魚粕は四國九州等を送て小農

民の手は落るとさる百石千六七百圓の大金よ上る

加之よ其費量の田壹反歩よ付大約壹石目よして價

乃ち十六七圓よ及ぶ然るは蔗粟の北海道に耕耘す

よ用ゆるの半量よ過さるへし然れハ乃ち其價半よ
して復た費量半よ過されハ甘蔗よ費す金額の四分
に過さる可し其外よ便益なるをハ北海道ハ土質沃
肥よして且新開の地なれハ兩三年ハ更に肥料と要
するのとき來るも強て魚粕と用ゆるよ及ハす鮮糞
の殘液を取て用ゆるときハ其費少なきを豫定し能
ハさるなり

第四 蔗粟ハ其成長甚速かよして忽ち田面よ覆陰するか
故よ能く蕪草と防制すよ雖とも甘蔗ハ之よ全く反對
することあり殊よ北海道ハ蕪草成長の期短よして一
度耕除すれば二度ハ重生するに少く且つ土壤柔よし
て鋤録の勞少なければとも甘蔗を作るの地の氣候溫暖

にして寒暑共よ蕪草趾と失せず且つ土質の多く砂礫
粘土混雜よして固燥なるか故よ鋤録難きのみなら
ず甘蔗の成長遅緩なれハ蕪草交々代々萌生するを以
て耕耘の勞蔗粟よ於けるに十倍と云ふも決して過言よ
非さるなり

第五 蔗粟の收穫不肖外國よ在て目撃する所及び我國
諸方の經驗と不肖か實驗したる所と以てすれば甘蔗
より多よ當り又糖分の多さハ本年始めて不充分なる
耕耘製造の法方を行ふと雖とも甘蔗よ讓らさると證
し尙耕耘製造其法宜きを得たるときハ甘蔗にも勝る
よかと信する也

第六 蔗粟の質と以て種とするか故に一反歩に播するよ

僅々三四升は過ぎず而して其價も金廿錢許まで足り
 且其代金を更な拂はずとも製造中豊熟したるものを
 撰取すれハ無代價一般にて爲せざるを難と雖も甘蔗ハ
 其選乃ち甘蔗を以て種とし其價ハ貯藏費及び貯藏し
 たる種の良と生存したると否と等源由ありて通
 常收穫高の一割余乃ち一皮歩は付金四五圓を費す
 非されハ能はず此を以て其損益如何ハ明かなる可
 右條々の如く蔗粟の便益と揚げ甘蔗の及ハると鳴ら
 ハ唯々北海道の地氣ハ蔗粟甘蔗の適と不適とを田舎者
 のよして甘蔗亦地氣の適度を得たる地ハ蔗粟ハ勞
 すと對譽ハ臺灣小笠原島等の如く甘蔗自然山野に蕃殖
 するハ琉球大島等の如く甘蔗ハ肥料を要せざる所ハ於

ハ其益少しとせし然るハ我四國九州等の如く耕耘の費巨
 大なる所ハ於てハ耕耘の法方妙美と盡し歐米各國の右
 出ると雖も到底製造の法方と改良するハあられハ輸入
 と防ぎは足る可き益なしと雖も蔗粟ハ耕耘の便益甘蔗に
 勝れ加ふるに西洋製造法と兼用せるとさハ其益尙ほ多
 と加ふべし依て漸次後部に製造便益のハ評算及び論理
 と以て陳述せんとす

蔗粟甘蔗耕耘損益の比較

阿波國讃岐國ハ甘蔗を耕耘する費と益の

一金四圓	甘蔗種
一金五圓	地租
一金拾五圓	肥料

一金 拾圓

農夫賃

一金 拾四圓

右一反歩の費として

一金 三十四圓

甘蔗一千貫目

但し千貫目に付金三十四圓價

右と収穫高とするときハ差引殘金ハ自ら耕作するもの
 自己の勞功と殘金即ち益金とするものなり而して即ち金
 三十圓を得るの割合なり
 北海道余市郡ハ蘆粟を耕耘する費と益ハ
 一金 三十圓
 無
 一金 三十圓

一金 十圓

農夫賃

右一反歩の費として

一金 三十三圓二十錢

甘蔗一千三百貫目

右を収穫高とするときハ差引純金一反歩ハ付金二十圓
 して農夫一名の勞力半反歩を限りとすれハ即ち金三百圓
 を得尙は自己の勞力益金に合するとときハ金三百圓を得
 甘蔗二十倍の益ある割合なり
 前條の件々 不肖の堅く証して違ふをなき者也

明治十三年九月

後志國高島郡色内村

興産會社々員

東京府

支那蘆粟試植報告

明治十三年萬年會より支那蘆粟種子を請ひ東京府下荏原郡下大崎村に於て三反歩の地を試植したるに好結果を得ざりき右蘆粟の播種後數月の間の順次を發育し曾て異状なかりしか八月頃に至て下葉の尖端少し枯色を帯ひ漸々凋萎し上葉のみとなれを始ぬその原因の何たるを怪みしか九月中旬に至て始めて虫害の爲めなるものと發見せしか此虫の灰白色にして其形蛆の如く大さ三分乃至六分幹の地際二三節目より心へ蝕入す幹の虫害を被ひたりたるものへその心腐敗して赤色酸味を帯ひ臭氣あり腐敗漸次よ

根も波及するに至て幹全く凋萎す試植の一反部へ此害を被むる最も早く巳に十月初旬より畑中一本も残らず枯凋せり他の二反歩へ虫害を發すると稍遅かりしを以て十月下旬迄も猶生氣を存せるものあり依てその中よ就て稍勞ひあるものを摘み取り搾て之れを製したるよ一つは黒色よして苦味なきもの一つは砂糖色にして甘鹹苦の三味を帯ひたるものとの二種の粘き液を得たり右の如く此試験の結果に失敗したれどもその原由の何れもあるかへ必ず之れを探らざるへからす即ち茲に栽培製糖の手順を記し參考に供するの必要なるを信す

栽培手順

地質 墟土 地勢 丘陵周囲は林あれとも日光を妨げず

播種 五月一日 畦と畦との距離 一尺八寸 畦上 種
 子の距離 五寸 發芽 五月九日 麥蒔取 六月七日
 間曳き 六月九日 一番作切り 六月廿日 二番作切り
 七月十八日 出穂 八月廿六日頃より 虫害 九月中
 頃より 蒔取 十月廿六日

製糖手順

生薑百〇四貫六百目即ち二反歩の中を撰りて蒔取りたるものより搾りて得たる所の液汁大約壹石四斗此液壹石に付生石灰四合を水に溶解して混合し之れを二分に順次に粗釜に入れて煮沸し塵及び不淨物を去り少しく放冷して後ち蒸發釜に入れて終期の徴候を見る迄煎し詰めたるよ最初の釜よては黒く苦きものを得次の釜よては砂糖色よし

て甘鹹苦の三味を帯ひたるものを得たり
 栽培并に製糖の手順略々右の如し虫ハ曾て捕獲して貯へ置きたるものあり今并せて諸君の電覽よ供す余か曾て聞く所ろよ依れハ凡そ虫の生するハ必ず一定の氣候と一定の食餌とを要するものよししてその氣候よ於てその食餌を得ハ忽ち蕃殖蔓延するものなりと本年東京近傍よ於て蘆粟を栽培せるもの少しとせす而して未だ曾て此の如き虫害の甚しきを聞かず依て愈ふよ余か試験の畑よ虫害を被ひりたるハ獨り氣候の爲めのみならずして必ずその植物中此虫を養ふべき物質を含有せるなるへしと果して然らハ第一其物質ハ何なるべきか第二何故よ此栽培よ方て此物質を生したるか第三凡て如何なる場合よ於て此物質を

生するや以上三問ハ此虫害を研究する方て先づ答へさるへからざる所なり或ハ云ふ此栽培方てハ全く肥料を用ひさりしか故ハ植物の成分中ハ一二の欠乏を生しその欠乏したる所の有様ハ正しく此虫を養ふに適したるものならんとりれ或ハ然らん肥料の欠乏の爲ハ虫害を醸すハ蓋しその例少なからず然れども此答ハ未だ以て尽せりもすべからず何となれば如何なる成分を欠乏し存在せる成分如何なる有様よしてろの有様ハ何故に此虫を養ふに適したるや等未だ明亮ならざるを以てなり而して是等の點ハ凡て前の三問中ハ含有したれば益々此三問を研究するの要用なるを信するなり又た製糖に關してハその結果の異常なるハ虫害の爲めに液汁の已ハ腐敗したるハ依る

と云ふものあり石灰の加減と云ふものあり火の加減と云ふものあり未だ確説を得ず要するに第一黒色よして苦味あるものは何なりや第二植物中の何の成分か如何ハ變化して此黒色苦味のものを作るや第三砂糖色よして甘鹹苦の三味を帯ひたるハ何なりや第四植物中何の成分か如何ハ變化して此物質を生せるや第五何故ハ同一種のものを得ずして二種のものを得たるや是等の疑問皆な諸君の高説を仰かんとを希望する所なり今更亦た現品を添へて明瞭と煩ハす抑も此試験の失敗の如き概して取り扱ひの不手漚なるハ依ると云へハ其れ迄の事なれともよく其實と究め其理を推さハ他日學問上實地上共多少の利益なしと云ふへからず是れ余が敢て教を請ふ所以なり

明治十三年十一月 常會員 花房直三郎

早熟琥珀甘蔗子實と食米分拆對照

水分	甘蔗	硬米
	八、九六	一三、六三

灰分(雜砂〇、二四と含む)	甘蔗	硬米
	一、三三	一、二八

纖維	甘蔗	硬米
	四、〇〇	四、〇〇

脂肪	甘蔗	硬米
	三、一七	三、二五

蛋白質	甘蔗	硬米
	六、四一	五、八〇

可溶解有機物(水分よ)	甘蔗	硬米
	五、六二	一、一一

澱粉等	甘蔗	硬米
	七〇、五二	七三、一四

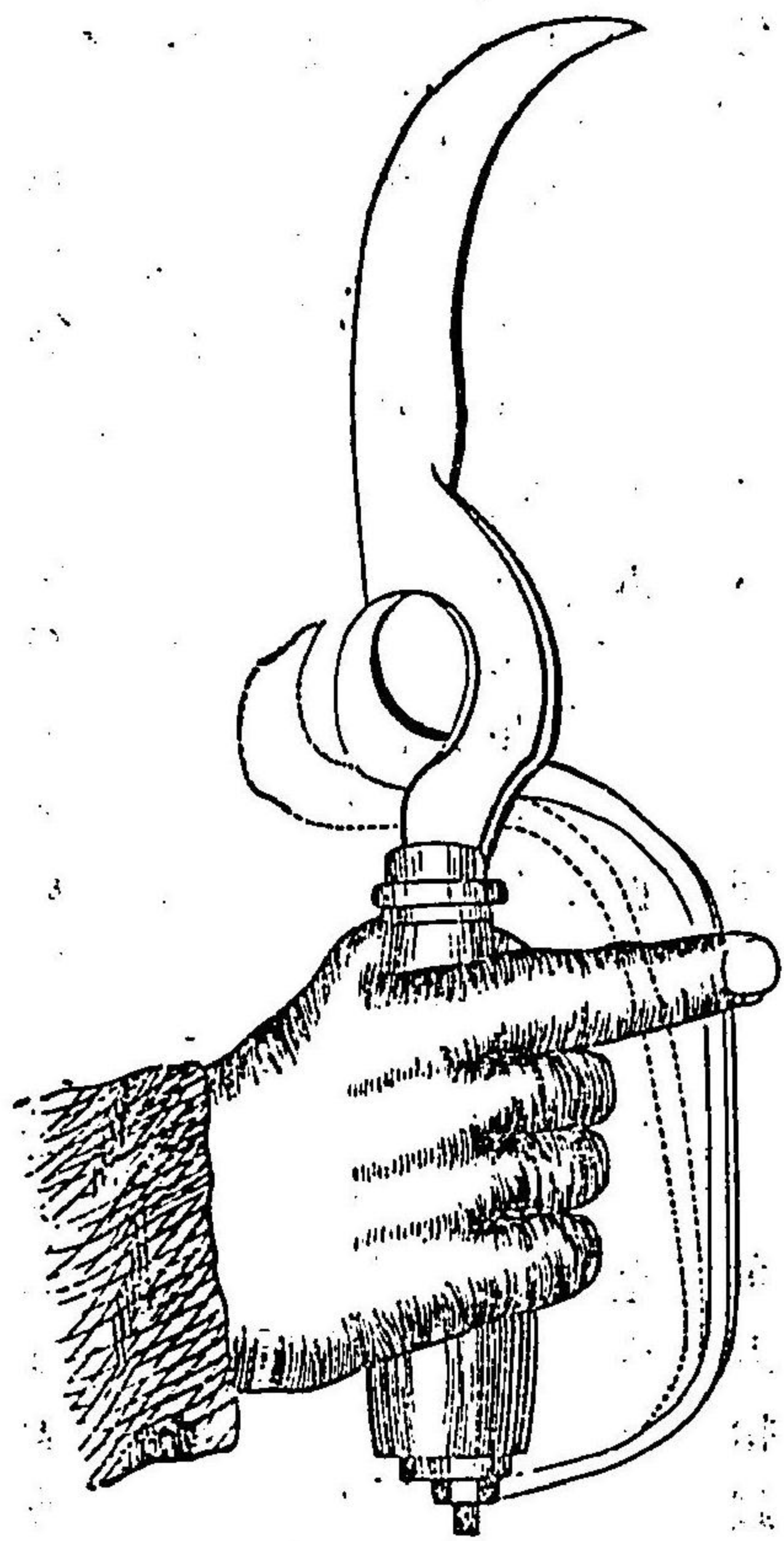
蔗粟子實	甘蔗	硬米
	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇

蔗粟子實は少しく單寧及び苦味質を含むに因り直に食餌に充つれば味苦く且澁みありて營養ならざるも數回の水

洗と經たる後粉とし餅類に製せし十分食米の用を足すへし其現物と試るに色味殆んど蜀黍と異ならず唯蛋白質は少しく乏しきと覺ゆるのみ(追補)

明治十四年一月 常會員 築山鏘太郎

糖莖収穫刀圖



右の糖莖の根と筋り穂と剪り又葉とも剝き取るに兼用する小刀なり甚た輕便ならんと察す圖と附して營業者より報そ(一種を登録す)

明治十三年十一月 常會員 大島圭介

明治十三年五月五日 糖莖反歩試驗

- 一 耕 五人 此手間賃 金壹圓廿五錢
- 一 蒔付 二人 同 金五拾錢
- 一 作切井二番肥共二人 同 金五拾錢
- 一 採取 五人 同 金壹圓廿五錢
- 一 一種 壹反歩 壹升 此代價 金壹圓
- 一 肥料 壹升 同 金四圓

元肥 此 譯 金三圓廿五錢

糠 半俵 此代價 金八拾錢

干粕 同 金壹圓

下肥 二荷 同 金三拾錢

灰 同 同 金三拾錢

ツクテ 同 同 金八拾五錢

二番肥下肥 五荷 同 金七拾五錢

小以 壹反歩琥珀甘蔗収穫 金八圓五十錢

一 壹九百五拾貫目 此代價 金九圓五拾錢 (租圓二百貫目の積)

一 實 壹石五升

差引 純益金貳圓

同

不詳

右の本年試作候處前書の通より有之候也

明治十三年十一月 武藏國東多摩郡中野村

佐々井 久和

新潟縣

蘆粟製糖詳細書

播種の期

五月三日より全月十日まで播種せり下た糞水糞を用ゆ

生育の方法

苗四寸位に至りたる時焼酎の粕を大桶に熟し置き施しホーを以て根に土を覆ひ除草す苗一尺七八寸に至り前の

如く土を覆ひ除草す肥料より干鰯を施す苗二尺八九寸

よりして糠及び魚の洗汁を施す苗四尺七八寸より牛骨の

類を施し刈り取るに至るまで都合五回なり最も本年は早

刈り取る時大桶の水を貯ひ置き之を施すと雖も早刈せ

り

収獲の期

十月五日より十一月三日に終る刈り取るより鎌を以てし

蘆粟の根上二節を残し穂下一尺二三寸を伐り捨つ根上二

節より刈り取るより一節をかけた馬の爪の形に切る是ハ糖

分の逃げざる爲めなり而して蘆粟の「ハ」を取り壓搾所

より送る

製糖の方法

六圓七十五錢

薪代價券千三百五十本

但シ 壹本五厘

計金三十圓八錢五厘

一反歩純益金十貳圓壹錢五厘

右本年栽培反別凡三町歩なり外は琥珀甘蔗栽培畑反別貳町歩なり

琥珀甘蔗試製糖概略

播種より培養方都て蘆粟より同し収穫の期九月五日より刈取り始め三十日より終る製糖の方法蘆粟より同し一反歩の總出入額重量目八百貫此液凡九石(百貫目より付)白下五十八貫目此砂糖三十五貫目(百七十四斤)代價三十圓五十錢(但シ)現今當地相當相場見込なり蜜(壹斤)二十貫目(百十五斤)代金十三圓五十錢(但シ)現今

前同斷計金四十五圓外に種實未た量目不試一反歩入費ハ蘆粟より同し純益金十四圓九十壹錢五厘

右ハ本年初試作故明言しかたし併し蘆粟より多益極り候得共當地杯ハ兩種栽培すへき者と見込候如何となれハ琥珀甘蔗ハ収穫の氣節早く蘆粟ハ遅し製糖順次都合おれバ

御會有之趣本縣より通知漸く一昨十六日到達の次第遅日よ至り御不都合ハ可有御座候得共本年概略別紙之通り差上候間可然御評の上便益の方法等御指揮願度尤本年ハ土用前より照り續き格外の早魁大に収穫相劣り候義ハ御座候尙人民ハ獎勵し漸々盛大ならんとを懇希罷在候間追々萬般の御指揮と乞ふ

十三年
十一月十八日

越後國中頸城郡大貫村

高田産殖社

矢澤綱四郎

群馬縣

蘆粟製糖試驗略表(本月九日壓搾器を調へ十日始めて試験す)

莖貫目一百貫目 糖汁量 八斗五升

白下糖目五貫目 (結晶糖不結晶糖不詳)

上野國北甘樂郡富岡町

甘樂製社主

古澤福吉

十三年十一月十七日

製糖師

江原庄造

茨城縣

栽培の手續生本年五月中東京の或る勸業篤志者より米國
蘆粟種五斗餘を惠授せられしを以て地味肥沃なる處を撰
み僅一畝歩許へ五月四日堆積肥凡を百貫目餘を混和し蒔
き付けたり播種後高さ一尺以上に至り一株三本立とし嫩
苗と間引き且つ雜草を抜き去る二回なり再び收穫迄畦切
中耕等ハ致さず

製法の手續實ニ饒かの試作たるを以て勸農局御藏版の製
糖試験録に倣へ製法すと雖も素より器械等も全備せず故
ニ好結果ハなかりし蘆粟莖の青く緑色を帯ひ高さ壹丈壹
尺許に至り種實全く堅固なるを以て九月三日悉皆刈取り
直ニ皮剝取り穂打落し之を從來の木製軋軋にて壓搾せし

よ力の十分ならざると以て糖汁甚た小量よして三斗五升
 と出すのみ糖汁を平釜よて汁一石よ付石灰一合割合よて
 三勺許よ配合し能く攪和さし徐々よ火を焚き沸騰するよ
 従へ濃厚なる泡沫を湧出せり時よ細篩よて之よ除き去り
 而して其清淨なる液汁を沈澱桶よ汲み取り約ね三十分時
 間据置き汚物を沈澱せしめたる後釜よ汲入れ煎煉す其際
 よ生する細小なる滓沫を抄ひ出せしよ液汁ハ次第よ暗褐
 色となり固有の香氣を發し精力を増し焦着の憂あるを以
 て木篋よて攪拌し之よ防き是よ於て結品の度を認むる爲
 め冷水を茶碗よ入れ其凝法如何を檢せしよ凝結するを以
 て火を消し直よ糖汁を磁器よ汲み取り攪拌すると十分時
 間其冷ゆるを俟て桶よ移し殆んど一週間放置すれども更

よ結品の徵候を現へさず色澤暗褐よして氷飴の如し
 外よ原野を開墾し僅か五畝歩へ米國種蘆粟よ堆積肥を混
 合し五月三十日よ播種せしよ高さ一丈許になりたると見
 れハ原野と雖とも生長するとは他の植物の類よあらず然
 れども結品の不十分なるハ前文の如し何卒結品するの方
 法御報道有之度願望候也

十三年十一月

常陸國筑波郡上郷村

土田銀治

朽木縣

一清國種蘆粟ハ昨年及び本年兩度實驗する處よてハ全く
 不頁と決定す來年より此種を絶つの見込第一水多くし
 て糖分少なく且幹よサビと生し易きサビを生したる

ハ苦味ヲ帶ヒ加之結晶分少なければなり
一米國種ハ極めて糖分多く且結晶もよし其割合ハ左の如
し

一反歩収穫幹	上等	千二百貫目	中等	千貫目	下等	七百貫目
幹千貫目白下	全	七十貫目	全	五十貫目	全	四十貫目
白下一貫目の製糖	全	七百目	全	六百目	全	五百目

一 本年當縣下ニ於テ試作したる反別ハ凡百町歩内清國種
ハ半數ならん故ニ白下の収穫ハ壹反歩ニ付四十貫目以
内の平均となるならんと云ふ

一 右相場ハ白下糖一貫目ニ付上等五十錢下等四十錢位

一 計算ハ追々詳細の報を得テ其精密なるを報スヘシト雖
とも先ツ一二聞く所ニテ左の如し

莖千貫目ニ付白下糖ヲ得る五十貫目

此代金貳拾五圓

但壹貫目ニ付五十錢替

此入費

金四圓 薪二百把

一把ニ付貳錢宛

金五圓 人足廿人

一人ニ付廿五錢

金貳圓 水車損料

金壹圓 器械損料

小ニ金拾貳圓也(是ハ概算ニテ過當ト思ハル)

差引十三圓純益此中より莖千貫目の代價金十圓と見
積るときハ純益三圓となる併し右の計算ハ精密なる

調ニ非ず薪代人夫の如きハ過當の計算と思ハル

右不取敢及報道候也詳細ハ不日製糖者の内惣代の者一兩

名出會の節持參可致事

十三年十一月十四日

地方會員 石

磨

山梨縣

蘆粟栽培製造の順序

一 地質 砂地方言真土と以て可とす然れとも乾濕甚しきハ共よ不可なり

一 種類 本縣の如きは各村共よ支那蘆粟を栽培せしのみよして未だ他よ琥珀甘蔗を栽培せしものあるを聞かず故よ本年當社よ於て之を面積二畝歩の地よ試作経験せしよ蘆粟よ比すれハ糖分多く且結品部分も多きと覺ゆ然れとも其莖蘆粟よ比すれハ甚た細小なりし一肥料 粉糠、糠或は酒糟、油糟を施す者ありと雖とも就

中粉糠を用ゆるもの其多きよ居る本年當社よ於て試みよ人糞を用ひて一畝歩を経験せしよ糖液果して結晶せさりし

一 播種耕作 凡そ四月廿日頃より五月十日前後迄よ種子を播し其後十日を過ぎて肥料を施し六月十日頃に至り凡三寸許りの距離と隔て、生莖を間引き然る后又肥料を與へ繼て土と掛け寄せ其根を廻ひ七月上旬よ至りて就中強壯なる生莖と剩し其間隔凡う四五寸の距離よ間引き再ひ肥料を與ふ且此期よ至れハ每節頻りよ嫩芽と生するか故に不斷之と摘採し九月中旬よ至りて其穗長して四分許を出し成熟の期と覺しき頃と以蒔採の期節とす

一製造 器械の從來駿州地方は用ゆる轆轤にして水車を以て運轉するあり牛馬の力を用ゆるあり蓋し水車を以て糖液凡う五斗を得之を一釜となし始終猛火を以て蒸發せしむるを可となす然りと雖とも揚釜の如きの稍や火勢を減して焦附の患を防かざるへからす其の順序の如きは先づ一番釜の將は沸騰せんとするとき最も意を注きて游離する處の疎滓を抜ひ次は聖を三四度は投入す但此聖は石灰を可とするあり蠟灰を可とするの説ありと雖とも何れか優劣あると知らず又其投入する數量は糖分多少結晶の強弱は依りて一定し難しと雖とも糖分結晶共に充實なるものは一合

以内は止まり其少しく不充分なるもの一合以上を投し甚たしきものに至れば三合以上を用ゆるも猶足らざるものあり澄桶より貳番釜へ遷し復將は沸騰せんとするときは白聖の集合するを待ちて之を抜ひ去り從て浮へへ從て投ひ不斷之を拾ひ取り漸々蒸發して既は熟煮の度に至りしを思惟せし少しく之と水中に注入し指頭を以て集合し静かき摘み揚げ得へきを以熟煮の度となし速く釜底へ三四杓の冷水を投し火熱を抑へて酌み揚るときは焦付の患ひなし

蘆粟栽培後來の目度

嘗て試みは蘆粟栽培製糖の概算を立ると凡一反歩は付六百貫目の生莖及び四十二貫目の白下を得ると至れば正は

其益と見るへし栽培其法と盡し地質其宜きと適するとき
 ハ當ふ此の如きよ止まらざるなり先般本社製造人を派遣
 して數ヶ村の製造所と巡回し栽培製造等の景況を察せし
 むるよ即ち別紙に舉る所の如く平均五分五厘よ止まるも
 のハ他なし栽培其法と得ず刈取其時と誤り一反歩よ付生
 莖僅三四百貫目の收穫或ハ生莖百貫目よ付三四百貫目の
 白下を得たる如き者少なからざるよ因れり然れども栽培
 稍其法と得ず刈取其時を誤るよ至らずして相當の益分と得
 たるもの之を彼の「久」と取たる者よ比するよ其數較々多
 きよ居るへし是と以て推考するよ僅よ益分と得たるもの
 ハ益研究の精力を得一旦損失したる者も自己の誤りを顧
 み復將よ其方法と試みんと欲し或ハ未だ猶豫して試みさ

るものも始めて其益得よ效いんと欲し人々相傳へ一村
 一里相效ひ從て栽培製造其種を「加」へ遂よ我山梨縣内よ
 蕃殖して其裨益の鴻大なるよ見るよ至る蓋し期して待つ
 へきなり

縣内各所栽培反別の概略

一反別	八反三畝歩	北巨摩郡武里村	所
生莖	五千貫目		
白下	貳百七拾五貫目		
一反別	壹町六反貳畝歩	北巨摩郡甲村	所
生莖	八千百貫目		
白下	三百六拾四貫五百目		
一反別	五反五畝歩	北巨摩郡安津玉村	所

生薑	三千三百貫目	
白下	百九拾八貫目	
一反別	三反步	北巨摩郡 篠尾村 製糖所
生薑	壹千八百貫目	
白下	百八貫目	
一反別	壹町三反三畝步	北巨摩郡 農産社製造所
生薑	八千貫目	
白下	四百四拾貫目	
合計		
一反別	四町六反三畝步	
栽培費	貳百四圓八拾七錢七厘	
生薑	貳萬六千貳百貫目	

製造費 三百九拾三圓
 白下 壹千三百八拾五貫目
 一反別 六百九拾貳圓七拾五錢
 代價 九拾四圓八拾七錢三釐
 差引
 益金
 壹反步の付平均

蘆粟收穫概算表

耕作地	畑壹反步
生薑	六百貫目
糖汁	六石
結晶糖	六貫九百三拾目
不結晶糖	九貫九百目
	五圓五拾錢
	三圓九拾六錢

蜜	拾六貫七拾目	四圓四錢三厘
質	九斗	九拾錢

總計金拾四圓四拾四錢七厘

明治十三年十一月十八日 甲斐國北巨摩郡 甲府紅梅町農産社

堺縣

蔗粟糖試作栽培方

種時付三月廿八日挿植六月一日但壹反歩よ三千株壹株よ
 苗二本宛植付日より五日間毎午後四時頃より氣薄の尿水
 と株元へ澆き掛け根付よ見定め壹反歩よ付干鬮七貫目を
 腐らせ下肥水杯と交合せ合せ三番肥とし一周間程を経て干
 鬮四貫目と雜水に溶き前と同様よ澆き都合五度干鬮壹反

歩よ付廿三貫目と消費し耕作ハ苗の根付と見定め取よて
 一度中打し又十日間を経て中打する都合三度蔗粟長貳尺
 計よ生育する比よ至て培へ十月土用前五日比より刈取と
 始め年よ依り十日前よ刈取るよありたり但穂の黒色とな
 りよより十日間を経て刈取るなり收穫量ハ一反歩よ付千
 貫目なり昨十二年よハ同國高市郡會我村五平なる者よ托
 し製造せしよ蔗六十貫目よ付白下糖廿斤を得しと雖も甚
 た粘り強くて餡よ似たり尤も機械ハ在來のものを用
 仍今年ハ縣下和泉國日根郡窪田村武本清次郎西村彌平兩
 人よ依頼し製造せしよ蔗六拾貫目よ付砂糖十八斤を得本
 年ハ早魃の爲め貳斤を減量せしも粘りハ少なし然れど
 も精製の場合よ至らず如此下品のものよ得る止らハ益少

なく野夫の試作せざる時ハ卑物となるべし我卿の如きハ
 山間よて霜露の下る早く甘蔗を作るを得ず故ハ蘆粟琥珀
 甘蔗の内よて國益を興すよとを日夜苦慮する所なり願く
 ハ白糖精製の道と教授あらんと

十三年十一月十四日 大和國十市郡木原村

滋賀縣

平田忠九郎

第一號	米國蘆粟	一畝	歩
第二號	琉球糖甘蔗	一畝	歩
第三號	清國蘆粟	一畝	歩

各種共同種の地即鶴と身瀨の水田よ干水渠と鑿り畑地よ

變せし地よして其質帶黒褐色の粘土よ凡二三分の小砂石
 と混し而して東北ハ人家よ横し西南ハ樹林よ蔽ハれ幸よ
 園圃の中央ハ空氣の流通と日光の射照と受くるも周圍よ
 至てハ推して知る可きなり故ハ蘆粟甘蔗よ至適の地質地
 形とハ謂ヘからず

播種及手入

第一號ハ四月廿九日第二號ハ五月三日第三號ハ五月一日
 よ播種せり其法各種共ハ略同様よして畦間の距離凡二尺
 四五寸而して株凡七八寸と距て種子三四粒づ、と下し漸
 次生長するよ隨ハ莖葉最も勢力あるもの一本と殘し其他
 ハ拔き棄て尙毎株發生する嫩芽と欠き取り始終一本立と
 なせり其外少しも手入保護と加ヘさりしなり

肥料の種類及其量

施肥の種類及分量も亦各種同様にして播種の際施せし肥料左の如し壹畝も付

人尿 四荷 木灰 三斗 腐水 五荷

尙播種後凡三十日即六月三日より至り再び左の肥料を施せり壹畝も付

木灰壹斗八升七合 米糠全量

收穫

薩粟及琥珀甘蔗へ在來の甘蔗と異にして開花結實するものたれへ收穫の適度は最も注意を要するとい既に昨十二年の試作に於て經驗し尙他の經驗説も傳聞せる所たり然れとも其適度を察するに彼此煩手の方法を用ゆるも却て

一般農家の實地へ行へれ難からんとを憂へ單に穂の色黒くして其實將よ硬固ならんとする時圃中三四ヶ所も付試よ刈り取り地面より第二節の莖中よ糖分の殆んど減滅せんとする時を收穫の期節と定め而して第一號ハ九月十一日より第二號ハ同十三日より第三號ハ同十四日より收穫し順次製糖も着手せり

製造

製造へ都て在來甘蔗製糖の方よ做ひ器械の如きも在來の石車を用ひたり但し竈ハ一口焚よして釜ハ甲乙丙の三箇と据へ甲釜よて荒汁を煮漸次水分を蒸散するよ従ひ乙の釜よ移し又仕上げハ丙釜に於てせり

石灰及燐灰の量

石灰及蠣灰の量の豫かしめ一定し難きを信せり如何となれハ茎の熟否と刈取り後時間の長短等より實際大なる差ぬれハなり今其大差あるもの、二三と例すれハ左の如し

米國蘆粟搾汁壹石ハ付石灰貳合を要せしものあり
 同 蠣灰三合を要せしものあり
 同 同五合八夕を要せしものあり
 同 石灰四合八夕を要せしものあり
 琥珀甘蔗同壹石ハ付 蠣灰貳合六夕を要せしものあり
 清國蘆粟同壹石ハ付 同壹合四夕を要せしものあり
 同 同貳合五夕を要せしものあり
 右の如く分量ハ大差を生せし原由ハ白下糖ハ製し即ち結

品分を見るハ至て判然たるを知れり如何んとなれハ清國蘆粟ハ要せし蠣灰ハ最も少くして而して結晶分を徴せしと最も先きなるのみならず蜜分最も少く其味と嘗むるハ酸氣亦最も少けれハなり但し在來の甘蔗ハ比すれハ概して結晶甚た遅く且つ蜜分の多きと見る(製糖後凡そ十七八日目ハ結晶を見ハせり)今一反歩ハ檢算せる平均收穫分合を示すと左表の如し

種類	反別	莖量	絞汁	糖量	糖量中結晶分	全蜜分	種質
米國蘆粟	一反歩	九百五十五貫目	十二石三斗五升	六百四十四貫目	三十五貫四斗七升	二十九貫〇	二石六斗
琥珀甘蔗	同	六百二十九貫目	四石九斗	二百五十五貫目	拾八貫四斗	未詳	
清國蘆粟	同	九百四拾五貫目	九石九斗	五百九拾九貫目	三拾二貫七斗	二拾六貫七	三石一斗

他の經驗証より由れの糖分ハ甘蔗より多く蘆粟より少く種實ハ之より反せるものとす然るに右表より由れの米國蘆粟に糖分最も多く甘蔗之より次ぎ清國蘆粟ハ又其次にして他の經驗証より反せるもの、如し故に本課本年の試驗ハ米國蘆粟を以て第一等とす今其第一等と看做するものより付差引計算左の如し

金拾八圓五拾錢
 金三圓
 金三圓五拾錢
 金拾三圓
 金拾三圓

金四拾一圓三拾三錢九厘五毛

金二拾四圓八拾三錢貳厘五毛

結晶糖三拾五貫四百七拾五匁賣却代但壹貫目七拾錢の割

金八圓七拾錢七厘五毛

蜜分二拾九貫〇二拾五匁賣却代但壹貫目三拾錢の割

金七圓八拾錢

種實貳石六斗賣却代但壹升三錢の割

出費收入差引

金貳拾貳圓八拾三錢九厘五毛 純益

明治十三年十一月

滋賀縣勸業課

長野縣

松本農事會第一試驗場製糖報告

明治十三年十月九日製糖着手搾液煎煉完成の事業四日精製方三日凡七日の結果

清國種蘆粟畑一反歩

- 蘆粟種子一升 此代金一圓
- 下種人夫二人 此賃金六拾錢 但一人金三拾錢以下同斷
- 肥料油滓 此代金二圓五拾錢
- 中耕人夫四人 此賃金一圓二拾錢 但二度分
- 摘採枝芽摘三人 此賃金九拾錢 但三度分
- 小以金六圓二拾錢 栽 培 費

蘆粟莖幹千八拾一貫六百六拾目

- 此刈取人夫四人 此賃金一圓二拾錢
- 搾液人夫八人 此賃金三圓六拾錢
- 同馬四疋 此賃金二圓二拾錢 但半日宛四日三拾錢宛
- 煎煉人夫四人 此賃金一圓二拾錢
- 燃料三拾二束 此代金一圓九拾二錢 但松材三尺繩把一束六錢
- 試驗紙石灰等 此代金拾錢
- 精製人夫六人 此賃金一圓八十錢 但二人宛三日
- 諸器械代支消 此金貳圓五拾錢
- 但諸器械代金五拾圓 二拾ヶ年賦支消の見込
- 小以金拾三圓五拾貳錢 製 造 費

合計金廿九圓七拾貳錢

糖液五百九拾貳貳五百三拾三匁

此白不糖八拾六匁七百期拾貳匁五分

内 糖 雜 質 拾 貳 匁 七 分 五 厘 二 毫 一 絲 一 忽 一 微

中白砂糖四拾八匁九百貳拾貳匁

此代金三拾六圓六拾九錢壹厘八釐實目金七十五錢替

糖蜜三拾七匁八百拾九匁五分

此代金拾壹圓三拾四錢六厘實目金三十錢替

合計金四拾八圓三錢七厘一絲二八八萬額

差引金貳拾八圓三拾壹錢七厘實目金益金實目金實目金

外 雜 質 作 大 麥 諸 費 引 實 金 三 拾 六 匁 七 分

此代金拾圓

合計金三拾八圓三拾壹錢七厘實目金壹々年潤益

當國に於て農産中收利の最も多きもの當時桑作とす
依て農産裁製收利の比例をず一人二人及び四人
桑畑壹反歩

桑苗千八百本 此代金四圓

植付八夫 此賃金七圓

肥料油滓 此代金貳圓

二年同手八夫此代金三圓

肥料 此代金貳圓

水以金拾八圓

此二年利息金四圓

合計金貳拾貳圓

肥料合金五圓

元資支消金貳圓貳拾錢 十年賦支消の見込

合計金七圓貳拾錢

上等桑千八百株

此代金三拾六圓

差引金廿八圓八拾錢

壹ヶ年潤益金

藍粟製糖及夏作共潤益金三拾八圓三拾壹錢七厘
藍粟裁製方超過八圓八十錢差引金九圓五拾壹錢七厘
藍粟裁製方超過

外は藍粟種子に算外且米國種に清國種より一割乃至一割五分の増し

但搾汁器械青石甯三箇俵立するものよて中央の齒車より雙方を運轉するものよして馬一匹人夫二人又ハ四人を使用して午前七時より十二時まで莖二百五十貫目己

上を搾出せしむ云ふ(圖ハ略す)

十三年六月十九日

琥珀甘蔗培養井製糖試験報告

本社試験場よて培養を試みたるハ三區の畑地を以てせり
甲畑ハ前年の稻田跡乙丙ハ現ハ大小麥を培養ある畑地
の中なりま下種ハ六月の八日を以てせり其時期を違へた
る原因ハ種子の荷物延着したるよりのとなり發芽の何れ
も同時なりしが稻田跡のものハ生口大ハ悪しく種子の十
分一位の割合見えたり其生長の景況を見るよ甲畑より
乙畑ハ後れ丙畑ハ乙畑より後れたり其原因ハ乙ハ大麥の
中よありて多少光線を遮られ丙ハ同じく遮らられたるの

247
 みならず小麦なかりしを以て其時間の乙より長かりし故なり畑地の都合に依り甲畑の苗を移植せしむ終ふ十分の幹茎に至らすして穂を出せり肥料の油粕と米糠を施しか米糠の方より益ある如く認めたり製糖の九月より十月中旬迄のものに結晶宜じかりしが十一月より至りし分り蜜分甚た多し収穫の壹反歩の茎八百貫目前後より實子の三石前後なり製糖の百貫目より白下糖七貫五百目前後より其内三分の蜜なり培養中の景況と概して云へば蘆粟の風の爲に倒れて死枯し或は土中の養分を過量し吸盡し自ら葉の緑色を維持するを能はざりし等の憂ひありしか琥珀甘蔗よへ夫等の憂ひなく始終健康に見ゆたり製糖中も總て蘆粟よ優るの見解と下せしかの所多ありき

右に今般御發會の趣旨傳承本社植物試驗場於て試験の實況及報告候也
 明治十三年十一月十四日
 信濃國安曇郡豊科村
 興産社

試製糖概略

砂土七層眞土三分の地は播種し蘆粟壹畧さへ寸余周り二寸位は生長し器械は庄本立の轆轤にて茎十貫目搾汁一斗許として其蒸詰しもの六百目内外なり未だ製造期節中なると初年の事故より利益判然たらず左に本縣勸業場にて製造方傳授を受け着手候也

信濃國下高井郡柳澤村
 瀧澤山松
 同郡田上村
 常田徳左衛門

記

一畑一反步 地味砂同村字北河原地價金十五圓
 右植付琥珀生薑千五百貫目(但肥料大)白下糖九十九貫
 目
 内 蜜糖二十七貫目 上白糖拾二貫目
 中白糖二十五貫目 糖三十五貫目
 此製糖費額金三十六圓よ西洋方做へり
 一畑一反步 地所前同所地價金十四圓
 右植付甘藷千四百貫目(但肥料)此白下糖百〇五貫目
 内

下 蜜 二十九貫目 上白糖 二十五貫目
 中白糖 三十貫目 黒糖 二十一貫目
 此製糖費額金二十八圓よ西洋方よ做へり

信濃國下高井郡竹原村

十三年

武田健次郎

十一月十七日

同國 同郡 中野村

吉谷新 作

福島縣

報告

一支那種蘆粟 一支那種蘆粟
 上畑一反步 開墾畑
 生薑千二百貫目 生薑八百貫目

實 三石五斗

實 一石五斗

一米國種蘆粟

一米國種蘆粟

上畑一反歩

開墾畑

生莖六百貫目

生莖三百二十拾貫目

實 一石五斗

實 八斗五升

壓搾汁糖量之調

一支那種

十三度五ノ
十二度六ノ
十〇度三ノ
平均拾二度三分

一米國種

十五度三ノ
十四度四ノ
十二度六ノ
平均十四度一分

但しボーメー氏露液尺を以て驗す

製糖實際收穫の調

一支那種蘆粟生莖百貫目よ付

此初製蘆粟六貫九百五拾目に當る

一米國種蘆粟生莖百貫目よ付

此初製糖七貫三百三拾目よ當る

製糖費の調

生莖壓搾一口七百貫目但し(壓搾器ハ鐵製)三本横ロ一ル

但生莖五拾貫目よ一釜とす

此製糖高四拾八貫六百五拾目(初製糖一貫目よ付)金四拾錢よ賣却す

人員五人馬二頭 但製糖人一人 同役夫一人 馬丁一人 火焚人一人 壓搾一人

一金一圓五拾錢 右人員給料平均三拾錢

一金四拾錢 馬飼料穀一斗但一頭五升つ、
 一金三圓五拾錢 松薪二棚三分三厘一棚一圓五拾錢宛
 但し土俗縦横五尺は横是一棚と云ふ
 計金七圓五拾錢

前記の比較は付我地方へ到底清國蔗粟の方必適なり且開墾地に至りては清國に限る目的なり右報告及候也

明治十三年十一月十一日

福島縣岩代國岩瀬郡須賀川村

橋本傳右衛門

常關農社に於て本年始めて琥珀甘蔗及び蔗粟の兩種栽培致し依て縣廳へ傳習方を請願せし處勸業科筒井清志氏出張致され社員黒川廣尹中嶋久の兩人傳習を受け製糖實驗

よ及び候處好結果を得たり然りと雖とも何分機械其他具備不致費用夥多にして損益不相償候得共社員一同有益ならんを確信し屈撓せしめて明年大に栽培製糖に従事せんと欲す依て本年栽培より製造の概略を左に開陳す
 産地并土質

福島縣下磐城國東白川郡棚倉土質は大概黒色は小砂雜り鹽分を含む所多し

蔗植并採収

支那種蔗粟時付は五月七日下午種す畦間の距離は二尺乃至二尺五寸毎株六七寸と距て一二本つ、莖の長さ八尺乃至一丈採収は十月六日より始む米國種琥珀甘蔗（是ハ勸農局より御下渡の種子なり）五月十八日以下同上莖の長さ六

尺乃至八尺採収ハ十月一日より始む蘆粟より成熟する十五六日間も早し
培養并施肥

蘆粟ハ六月初旬焼酎糟水と混和し之を撒布し而して后二日間を過ぎて耕勸す是より成熟迄時々雑草を抜取りしのみ八月七日夜大風雨の爲め被害此よ於て該莖五六本を束ね藁等よて縛り之を防ぐ琥珀甘蔗ハ六月中旬以下前同様栽培す
器械并液汁比重一升量

壓搾器械ハ日本製よして人夫四人を以て搾りたり液汁ハ生薑拾貫目よ付九升三合を得たり
比重 蘆粟ハ七度より六度迄
甘蔗ハ八度より七度迄

一升量 蘆粟ハ四百八拾日
甘蔗ハ五百日

釜ハ平釜よて二斗五升入糖蜜分離器ハ酒造家にて用ゆる器械の如く装置し蜜分を絞り取りたり

煎滅并糖蜜分離

第一煎滅時間二斗五升の液汁沸騰より沈澱迄四十分間沈澱時間三十五分間第二煎滅時間沸騰より結晶點迄二時五十分間都合煎滅四時十分此白下蜜糖一貫五百目之よ費したる露量拾二貫四百目全液結晶を奏成したるハ三十時間よして畢る外不結晶の分も有之尤も蘆粟より琥珀の方ハ結晶速かよして味ハ最も善し
白下蜜糖一貫五百目之を蜜分分離して天光糖六百八十目を得たり

今般費會よ於て特別該會開設せらるの廣告を得依之前陳
の手續書差出候間御審議の上御教示よ預り度奉願候也

明治十三年十一月十七日

磐城國東白川郡棚倉

開農社々長

石澤寛助

宮城縣

蘆粟琥珀甘蔗植栽製糖の概況

本縣よ於て客歲始て清國種蘆粟及び米國種琥珀甘蔗を植
栽し且製糖を試験せしよ素より創業なるを以て栽培製糖
共に不研究よして製糖ハ青色を帯ひ臭味と含み未だ充分
の結果を視る能はずと雖とも栽培の簡なると收穫の多量
なると結晶の易きとを以て其利益尠なからざるを信認し

管下人民一般の熱心して該業を企望するに至れり客歲試
驗表を
添へ之を故よ栽培及製糖と望む者最も多きと以て今春勸
農局よ請求し米國より琥珀甘蔗種子二拾石と取寄せ蘆粟
ハ客歲本縣試驗場よ植栽せし種子を以て管内各郡村よ配
附し植栽したる反別概ね百町歩余此内概ね六分ハ蘆粟
四分ハ琥珀甘蔗なり而
して製糖場を設くるの數三拾三ヶ所絞莖器械石造木製鐵
卷製の三本
轆轤なりの數五拾基なりとす且製糖教授者ハ客歲試驗場よ於
て傳習せし生徒の内最も熟達せしと撰み之を各地の製糖
場よ派遣従事せしむ然るよ今尙製糖中なるを以て之れか
結果の如何を明言する能はずと本縣試驗場よ於て今
日迄實驗せし概況を左よ掲載して貴會の参考よ供せんと
す本縣勸業試驗場に於て試植せし蘆粟琥珀甘蔗并よ該場

は接近せる各村人民植栽せし分共併て反別拾町歩余の糖
 莖を製造したり琥珀甘蔗の八月十九日より製し始め十一
 月初めは於て終れり蘆粟の九月下旬より始まり今猶製造中
 なり然るは兩種共播種と移植とを試みたるは蘆粟の播種
 の風災の恐れ少なく加ふるは成熟も速なりと雖とも移植
 の成長遅緩なるのみならず十中の六七は皆風災は罹り糖
 莖折れ倒れ爲めは腐敗して收量を減少せり琥珀甘蔗は播
 種は勿論移植と雖とも風災は罹るなく總て蘆粟より成熟
 速なれは刈採りの后麥を播種するは便よして且結晶糖分
 多し唯種實の食料は供し其味の蘆粟は劣るあるのみ蘆粟
 は本年風災は罹るのみならず糖分中(白下糖)を言ふ不結晶糖分多
 量よして琥珀甘蔗より劣れりとす依之將來は蘆粟を減省

し専ら琥珀甘蔗を栽培するの目的なり

製糖の方法は門國地方は於て古來内國の甘蔗製糖の方法
 は模倣したり然れども牡蠣灰を用ひず生石灰を用ふ薪料
 は松薪を九分粗石炭一分と併用せり絞莖器は勸農局へ製
 造の鑄製三本ロール一基と馬一頭曳みて回旋す(馬四頭を
 用ひ十二時間として糖莖七百五拾貫目を搾る亦水車を以て
 石造の三本ロール三基を据付け十二時間は莖量二千貫目
 を取む且つ泡沫を除くは「フカシ」取の法を用ふ其仕様の蓋
 の蓋を透し泡沫を沸騰流出せしむ其流出せし泡沫は再び
 集めて又煮熟も此方法の泡沫を七ひ採るの慣法は勝れり
 とす其他は從來の製造法と異なるなし尙詳悉は左の略表
 を掲ぐ

製糖試驗表

琥珀甘蔗九月十五日	ホクトメーテ	蔗量	液汁	白下糖	砂糖	蜜
	七	度	九	斗	五貫目	三貫目
蔗	粟十月四日	ホクトメーテ	蔗量	液汁	白下糖	砂糖
	十	度	百貫目	一石	六貫目	三貫目

全器械實驗表 但一日十二時間

水車	石製三本	量	液汁	白下糖	人夫	丙男六人
	三	千貫目	拾六石	百貫目	十二人	丙女六人
馬四頭	鐵製二本	量	液汁	白下糖	人夫	丙男五人
	七	百五十貫目	七石五斗	四十五貫目	七人	丙女二人

但石造の三本ロールの馬力を以て回旋するときハ一
 基一日量三百貫目と搾るゝ過ぎす今本表と掲ぐる
 三本ロール三基よ二千貫目を搾汁するものハ全く
 水車力に因るなり故に鎮製三本ロールも馬力を水車
 力に換ゆるときハ尙一層の量と増加せるや明なり
 蔗粟琥珀甘蔗比較表 但反別一反歩

琥珀甘蔗	蔗量平均	種質平均	白下糖	砂糖	蜜
	千貫目	二	石五拾貫目	三拾貫目	二拾貫目
蔗	蔗量平均	種質平均	白下糖	砂糖	蜜
	六百貫目	三	石三拾六貫目	拾八貫目	拾八貫目

栽培製糖概算表

但反別一反歩
 附水車器械を用ゆ

肥	料	培	炭	炭	石	計
三圓五拾錢四	圓三圓七拾五錢二	圓二	圓二拾五錢	拾五圓五	拾錢	拾錢

此製出高

蔗量千貫目 琥珀甘蔗

此白下糖目形五拾貫目
 丙

中白糖三拾貫目

此代金二拾一圓 但一貫目は付金七拾錢の割

蜜貳拾貫目

此代金四圓
種實貳石

但一貫目は付金貳拾錢の割

此代金五圓

但壹石は付金貳圓五拾錢の割

合計金三拾圓

差引金拾四圓五拾錢

純益金

但人夫雇賃ハ男上等貳拾五錢中等貳拾錢全下等拾五錢女ハ平均拾三錢なり(宮城縣勸農報告書ハ略ス)

宮城縣勸業課

菅森縣

米國種琥珀甘蔗耕作并ニ製糖試驗概略

一反別一畝歩 全郡百石村支三澤字北山

肥料屬ハ粕少量を用ひ長六尺以上八尺迄ハ生育せり莖四十貫八百目從來の搾汁器械を以て三斗五升六合二勺を得て白下糖五升二合外ハ實八升を得たり

陸奥國上北郡

十三年 十一月廿日

産業掛

糖蔗集談會報告畢

新製搾汁器械賣捌廣告

ウキトル、ミル 價 百八十圓

一晝夜千貫目内外の糖蔗を搾り得る最良の器械にて夙に歐米各國へ行はれたるは昨年我東京赤羽根工作分局にて之を米國より取寄せ撰造の上敝社其他各所にて之を實驗したるは其簡便にして利益あること未だ嘗て見ざる所なり然るは此たび工作分局より其賣捌を敝社に命せられたれば自今廣く四方の需めは應じて諸君が興産の志を翼成せんと欲す但し其運用取扱法等を熟知せざる諸君は弊社にて之を傳授すべければ續々御注文の程伏て奉願候

東京麻布 學 農 社

糖蔗種子賣捌

ミソタ早熟琥珀甘蔗種子

一升よ付
現金廿五錢

近來外國より輸入せし糖蔗を蘆粟と云ひ其種類頗る多し
而して其中よ就き最も精良の種子と評せらるゝは米國種
*チソタ早熟琥珀甘蔗よして其質の善良なるは我々亦之
を信認せり依て四方の需求も應じ世の製糖も従事する諸
君の意も副はしめんと欲す

東京麻布 學農社 實驗掛

製糖新説

近刻

此篇は糖蔗の種類種子の得失培養の便宜製糖の方法器械
の使用其他糖蔗の耕耘及び器械の精粗等荷とも製糖家の
参考とも爲るべき事項は詳明に解説し務めて實試家の便
を謀れり世の製糖を業とする諸君および製糖も志ある各
位之を一讀せるの勞を吝み給ふな

東京新橋竹川町 學農社 雜誌局

明治十四年四月十二日出版御届

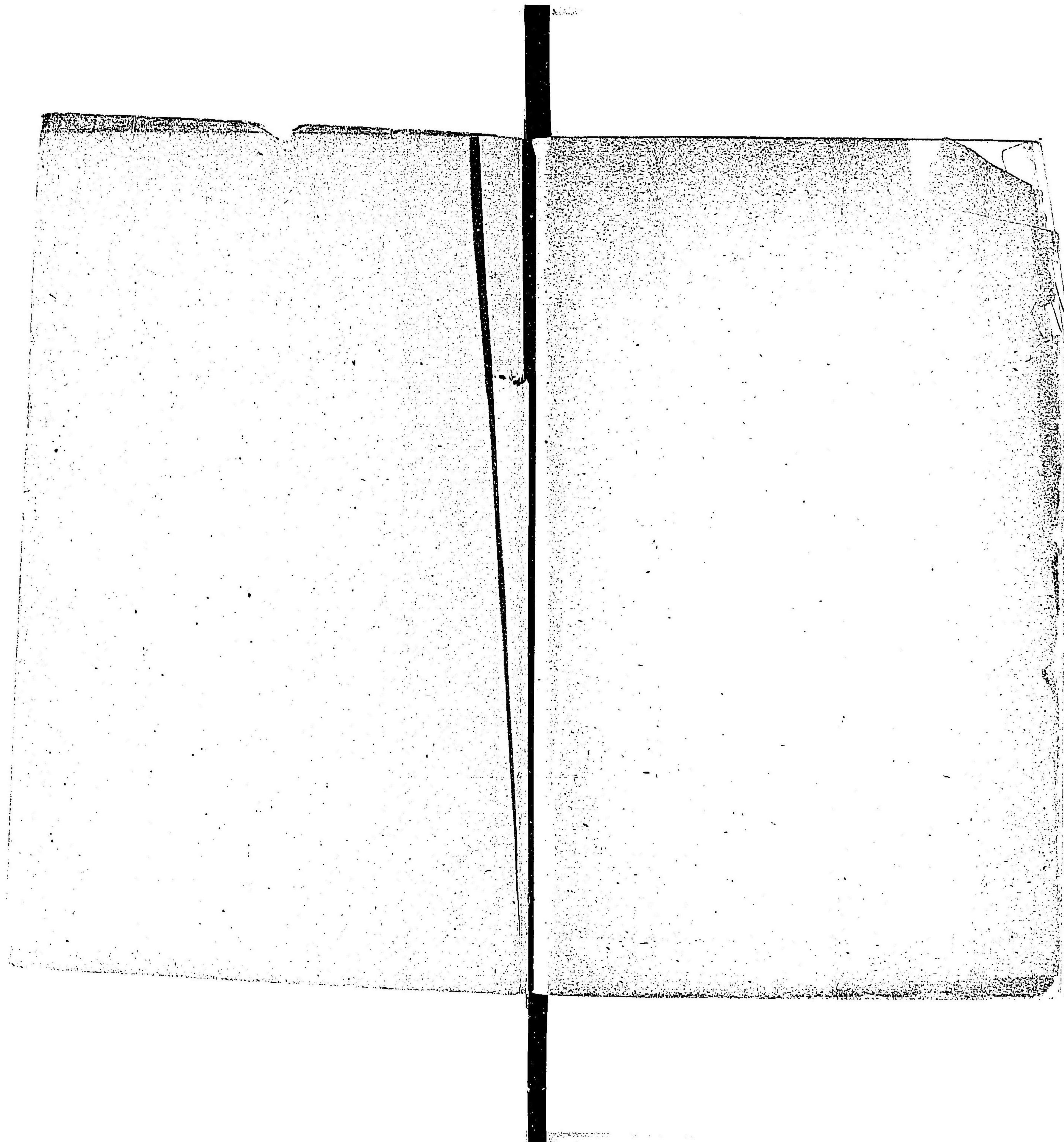
定價金五十錢

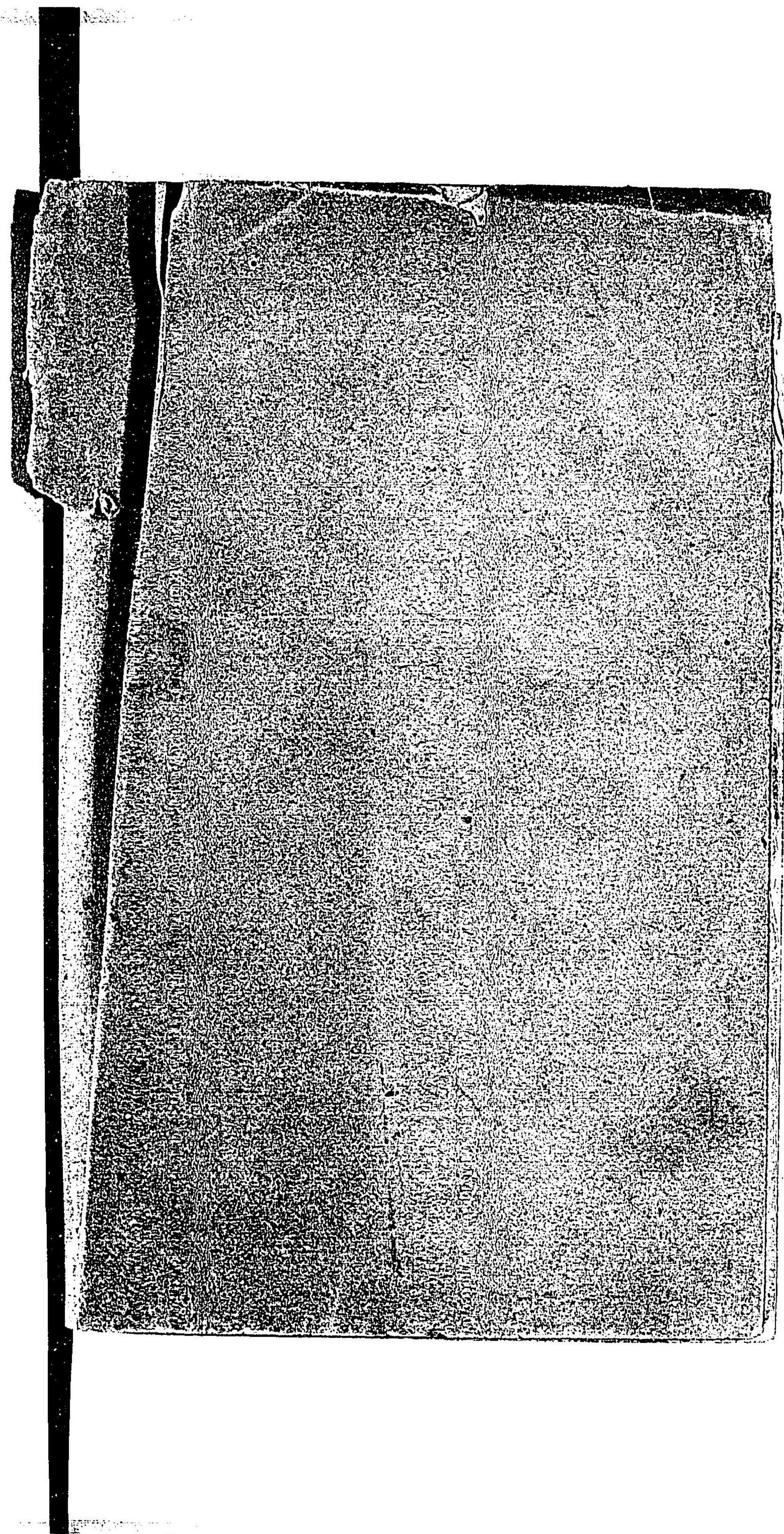
發 兌

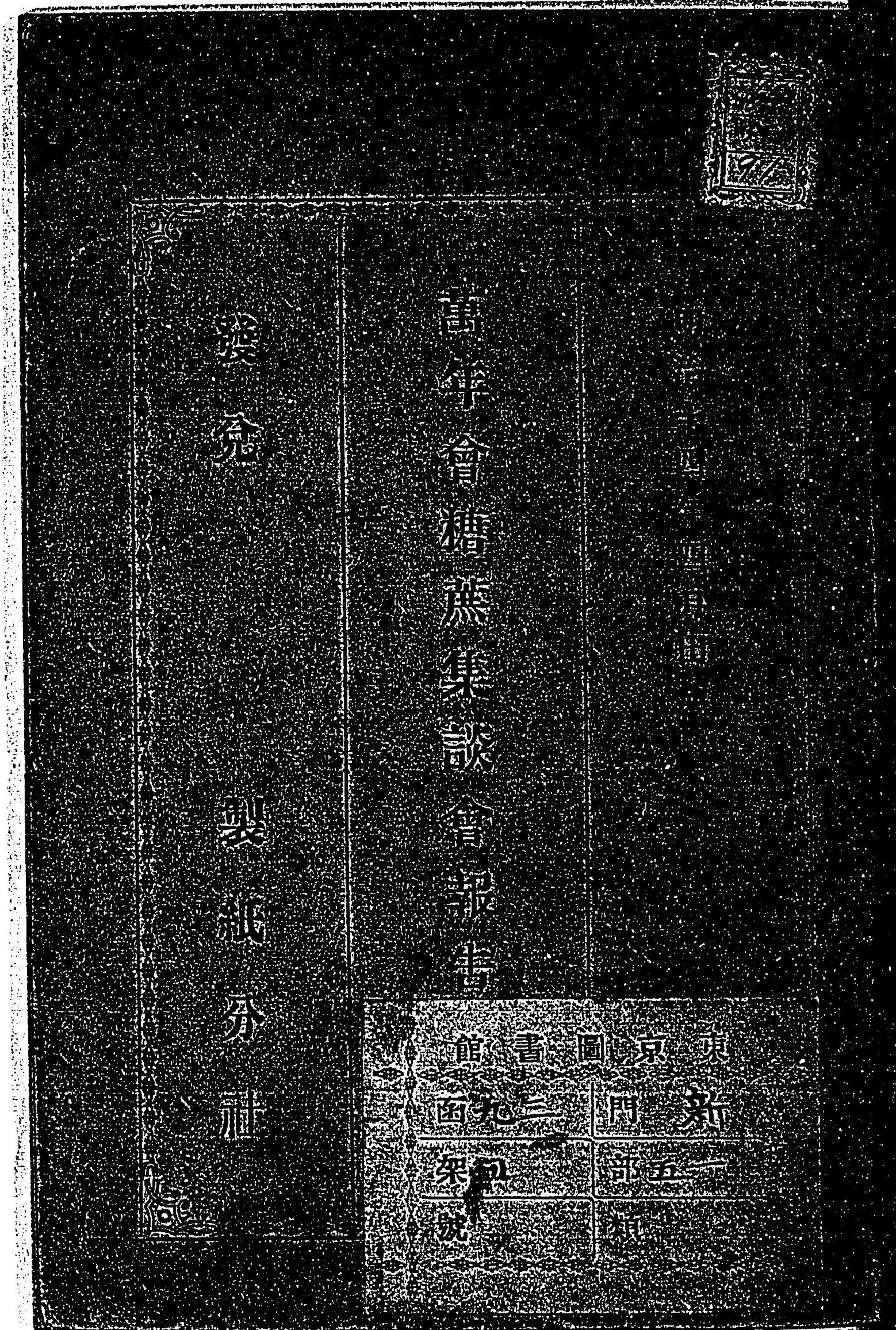
東京日本橋區兜町壹番地
製 紙 分 社

賣 捌 所

東京日本橋區通三丁目
丸 屋 善 七
全 南傳馬町
有 隣 堂







204292-000-5

特24-781

萬年會糖蔗集談會報告

製紙分社

M14

EDQ-0102

